Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-03-15

「お笑いコント」づくりを通した青年期の自分づくり(資料)

澤田，淳太郎

(Citation)
日本特殊教育学会第57回大会 自主シンポジウム10-4「自分づくりの段階表」の意義と可能性 : 教育実践と発達理論をつなぐ試みとして

(Issue Date)
2019-09-23

(Resource Type)
conference object

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90006355

2019.9.23

日本特殊教育学会第 57 回大会「自主シンポジウム 10-4」広島大会

「お笑いコント」づくりを通した青年期の自分づくり

鳥取大学附属特別支援学校
専攻科担任　澤田淳太郎

1　鳥取大学附属特別支援学校高等部専攻科について（別紙資料 PP.69-70）

・鳥取大学附属特別支援学校は 1978（昭和 53）年に開校した知的障害特別支援学校
・児童生徒の「人格的自立」をめざし、「生活を楽しむ子の育成」が学校目標
・「自己運動」（図 1）を循環させること＝「自分づくり」を大切にした実践
・本校専攻科は国公立知的障害特別支援学校で唯一の専攻科
・2006 年に設置して以来、「子どもから大人へ」「学校から社会へ」という二重の移行支援を理念としている。
・教育課程は５領域（くらし、研究ゼミ、労働、教養、余暇）
・専攻科生が自治的に取り組む中（七転び八起きと表現しています）で「自分づくり」

2　「お笑い」実践に取り組むきっかけ（別紙資料 PP.70-72）

・軽度の知的障害で、自閉スペクトラム症の青年２人との出会いがきっかけ
・ぶつかり合う、タイプの違う「真面目」な青年たち[1]だからこそ、その真面目さをいい意味でくずしたい。
・一緒に誰かを笑わせる楽しさを感じてほしい。

3　「お笑いコントづくり」を通した変容（別紙資料 PP.72-79）

（1）「お笑い」実践の概要

時期	内容
１年生時	研修旅行やボランティア活動での「厚切りジェイソン」ネタや「ドリフ」の歌
２年生８・９月～１０月	「ふれあいまつり」でのステージ発表
２年生１０月～１２月	「研修旅行」での他県の専攻科生との交流
２年生１月	福祉施設での出し物

（2）特に研修旅行の取組みから

＜学習の流れ＞

①プロの技からお笑いのポイントを考える
②誰に披露するか確認して、ネタを話し合う
③コントを作ってみる（パート１：全員で）
④コントを作る（パート２：グループで）

＜特徴的な姿（④の過程から）＞

・B くんと C くんはコンビを組んで「ドリフ」の学校コントをすることになる。
・それまでの２人の関係とは違った形でのぶつかり合いが見られた。
（ビデオ１：けんかのようになりながらも意見の調整をする２人）
・実践を通して２人は「犬猿の仲」と言われた関係性を変化させていった。
（ビデオ２：最終的に完成させたコント）

＜「お笑い」コントづくり実践で大切だと感じたこと[2]＞

・見ている人たちが楽しいことが自分たちにとっても楽しいという互恵性がある
・他者意識をもつことが自己客観視につながる
・必ず笑えることはないので試行錯誤して議論できること
・その過程でクラスの仲間を深く理解していくこと

<u>＜重要なポイントだと思ったところ＞</u>

①　青年たちの価値観が転倒

2 人ともそれぞれに自分なりの基準を持っていた。それらは知的障害であることに加えて成育歴や自閉スペクトラム症であることも加わり、いわゆる他律的道徳感[3]が強い時期に「～せねばならない」という意識が脅迫的に強くなっている部分があったのではないかと感じている。（それは、「自己基準枠」の調整をしていく時期[4]に、調整をする機会なく、一方的に価値観や基準を決めていかれるような状態として）。

⇒しかし、お笑いコントを創りあげていく中で、脅迫的で固定的になっていたそれぞれの価値観を変えていった。

②　意見の衝突の調整

交流する県外の専攻科生を笑わせるという目的のために、お互いの思いを衝突させながらも、折り合いをつけ調整した。自分のこだわっている部分を押し通すわけでなく、かといってあきらめもしない、お互いに妥協できる部分で折り合いをつけていった。こうして学習の最後の方には C くんが B くんの方に手をまわして 1 年生のコント練習を見守る姿が見られた（参考資料 P79 の写真）。

こうした姿の発達的背景には、「自分づくりの段階表」に出てくる集団的自己というものの成立を経験することにより、価値を見出していることがあるのではないかと考えている。

４　「自分づくりの段階表」の活用について

・子どもや青年たちをとらえるときに「自分づくりの段階表」を活用している。
・一方、教職員は県との人事交流であり、「鳥大附属はこれを使う」という伝統的に使っている部分もあるように感じる。（そのため、生活年齢よりも低くとらえる場合もある。）
・ただ、子どもや青年たちを「なぜこうするのだろう」「今の行動・発言の意味は何だろう」と捉えていく中で、「人格発達」への理解を教職員も深めながら進めていることも事実である。
・それは、実践を通して、その実践の中の子どもや青年たちの姿を通して理解を進めたり意味づけたりしているという意味である。
・それぞれの生活年齢にあった教育実践を企図することで、子どもや青年たちの姿に変容が見られ、その変容する姿から「自分づくりの段階」への理解を進めたり意味づけたりしている。そこから「自分づくりの段階表」のとらえ直しもしている。
　⇒「自分づくりの段階表」を使い続けているのは、教育実践を通して子どもや青年たちの変わる姿に意義や手ごたえを感じているからだと思われる。
　　⇒「本校卒業後も『自分づくり』をしていってほしい」という発言が教職員から出ている。

注

---

[1] 川地亜弥子（2019）「自閉症の子ども・青年と授業づくり」三木裕和、越野和之、障害児教育の教育目標・教育評価研究会（2019）『自閉症児・発達障害児の教育目標・教育評価１』PP.92-104

[2] 前掲 1 のまとめを参照した

[3] 楠凡之（2002）『いじめと児童虐待の臨床教育学』ミネルヴァ書房　PP.4-17　この中で、6～9 歳の児童期について「力関係が明確に異なる教師や親の見方、考え方を子どもたちが相対化することは困難であるため、ピアジェ（J.Piaget 1932）が『他律的道徳』の時期と名づけたように、教師などの大人の視点、大人の意見を無批判的に取り込んで善悪の判断をしていく場合が多くみられる」とされています。

[4] 別府哲（1989）「五―六歳」荒木穂積・白石正久編『発達診断と障害児教育』障害者問題双書　PP.175-205 の中で、「五―六歳の時期には確固とした『自己基準枠』をもち今度はそれをもとに『自己基準枠』を他者の提示するあるいは外的な基準枠との関係で『調整』していくことができるようになる」とされています。